

一年以上前(1999年)に、ある新聞に以下の文を掲載していただきました。新聞ではなく、旧聞になってしまいました(^_^;)が、もともと自閉症の映画についてご紹介しようと考えていましたので、これに新規情報も加えて少し注を付けてみました。

あるお父さんが会社の部下に「課長、私このごろ自閉症気味なの」と言われて、「うーん、それは違うと思うよ。ほんとの自閉症が見たければうちにおいで。よく動き回る明るい自閉症児が一人いるから」と答えたと言います。

私も二男のことをきかれると「とても明るい自閉症児です」と答えます。

自閉症はネーミングのせいで誤解されやすい障害です。文字の意味からすると、自ら閉じこもっているみたいですね。実はそう思われていた時代もあります。つめたい親に育てられた子供が防御として自らの殻の中に閉じこもってしまったのだと。

フロイト派の精神分析家がとなえたこのような考え方は、今ではトンデモ本の世界ですが、勘違いした対応をされて不幸な状態になった自閉症児や家族たちがかつては世界中にたくさんいました。

(1)

自閉症は、現在では、脳の中樞神経系の器質的な障害であることが明らかになっています。情報の伝達をつかさどる神経物質の働きがよくないのです。

情報の受け入れと処理に問題があり、そのために、言葉やコミュニケーションに問題が生じます。

たとえば、私たちが言葉も文字もわからない、しかも生活習慣も違う外国に突然一人で行ったとしたら、とても不安を感じると思います。自閉症の人々はそれと同じような不安をこの社会との関わりの中で日常的に感じているのです。

さきごろ山田洋次監督の「学校」という映画が公開されました。主人公の息子さんの自閉症児を演じた黒田勇樹さんは、あの「レインマン」のダスティン・ホフマンと同じくらい上手でした。ブルース・ウィリス主演の「マーキュリーライジング」にも自閉症児が登場しますが、子役が好演しています。俳優だけでなく、映画作りのスタッフが自閉症をよく理解していることがわかります。

(2)

ところが、その映画の日本版の解説を見ると「両親を殺されてそのショックで自閉症になったサイモンが…」などと書いています。

映画を見ずに解説を書いているのですね。実はわが国ではまだまだこの種の誤解がたくさん見られます。その裏には「心の傷 癒し」という安易な物語を作りたがる短絡的な発想があるのでしょう。

現在、欧米では自閉症が誤解されることはわが国よりも少ないようです。「自閉症を知ろう週間」などを通じ、科学的な根拠に基づく広報が行われて、教育現場は当然ですが、一般社会でも正しく認識されているからです。

最近、高機能の自閉症者の書いた自伝が出版され、彼らが主として視覚的な手がかりで思考していることがわかってきました。

(3)

だから、言葉以上に視覚的な伝え方による援助が有効なのです。絵カードやスケジュールをつかって見通しを立てやすくしてあげることなどは、そうした特性にそった工夫です。

自閉症の人々は、本来生真面目で律義です。そして、自閉症の人々が安定して生活できる社会は、私たちにとっても居心地のよい社会です。そのことをわかってほしいと思います。

(1)

もっとも影響力があったのは、シカゴで活躍し後にフランスに渡った精神分析家B・ベッテルハイムの『うつろな砦』(邦訳はみすず書房、1973・1975)です。ベッテルハイムをはじめとするフロイト派は冷蔵庫母親論をとなえ、自閉症を環境要因によるもの、心因性と考えました。そして、強制的な母子分離(母親から子どもを取りあげる)をした上で非指示性の遊戯療法(指示を出さず好きなようにさせる)を施しました。その結果は親にとっても子どもにとっても悲惨なものでした。

フランシス・タスティンという英国で活躍したフロイト派の有名な女性精神分析家がありますが、その

セッション記録を見ると一人の症児に対する320回目(なんと!)のセッションで「おっばい」という一言を聞いて、これで彼の心の深層にあったトラウマの正体が判明したと豪語しています(邦訳「誤謬の永続化」『イマーゴ』青土社1996)。

これらの書物や論文を今読むと滑稽を通り越して恐ろしくなります。でも、もっと恐ろしいのは、この日本でいまだにベッテルハイムを褒め称えたり、タスティンを評価したりする人々がいることです。さらに、こうした考え方の延長線上に考案された間違った療育技法を今でも無批判に使っている人々がいることはたいへん問題です。

フロイトの業績に関しては、「歴史的な意味」は認めるべきですが、論そのものは現在では科学的に完全に否定されています。たとえば、主著である『夢判断』についての批判はハーバード大学精神医学科教授・アラン・ホブソン『夢見る脳』(どうぶつ社1992)を参照していただければよくわかります。

なお、私は精神分析や遊戯療法そのものを批判しているわけではありません。それによって救われる人々もいると思います。しかし、精神分析がとりかえしのつかない間違いを犯した歴史的な事実、科学的な事実を確認しておいてほしいのです。それは、本当の臨床とは何かということを問いただすことでもあります。

近年学校現場に入ることが多くなった臨床心理士には精神力動系の勉強をしてきた方が多いのですが、残念ながら自閉症など発達障害に関する正確な知識を持っている人は少ないのが現状です(現行の資格認定試験の問題にもあまり発達障害のことが扱われていません)。発達障害の問題を基礎においてはじめて子どもの心理がわかることも多いと思うのですが、専門家ならばもう少し勉強してほしいですね。

〽 2)

「学校Ⅲ」: 大竹しのぶ、小林稔持、黒田勇樹ほか。原作は、鶴島緋佐子『トミーの夕陽』。

「レインマン」: 原作はリアノー・フライシャー(早川書房)。優れた視覚記憶力を多少誇張していますが、名作です。自閉症に関する広報として世界的な役割をはたしました。

「マーキュリーライジング」: 偶然、国家機密に関する暗号コードを解読してしまった自閉症児が命を狙われ、それを一警官が守るといふ、粗筋はアメリカ映画によくあるパターンですが、サイモンを演じた

子役ががんばっています。原作は知りませんが、双子の自閉症児が偶然殺人現場を目撃してしまい追われるというB・キャンベル『逃走』(講談社文庫)の筋を少し使っている感じがします。

最近、「君が教えてくれたこと」(TBS)、「天使が消えた街」(日本テレビ)と自閉症を扱ったドラマが2本も放送されましたが、取材と作りの丁寧さではTBSの勝ちですね。いずれにしろ、日本のものを見るときには親はドキドキしてしまいます。

〽 3)

オーストラリアのドナ・ウィリアムズさんとアメリカのテンプル・グランディンさんが有名ですが、後者の『我、自閉症に生まれて』『自閉症の才能開発 - 自閉症と天才をつなぐ環』(いずれも学習研究社1995・1997、それにしても後者はひどい邦題だ > 学研営業部! 原題は"Thinking in Pictures"なのに)の2冊は、自閉症の人からこの世界がどのように見えているのか、またどのように思考しているのかを知るために重要です。

最近出版されたグニラ・ガーランド『ずっと「普通」になりたかった』(花風社)も優れた自伝です。ガーランドさんはスウェーデンの方ですが、学校での体験について詳しいです。自閉症者がいかに視覚的に考えているか、抽象的な概念がどれほどわかりにくいかということがよくわかります。

また、精神世界に関する類まれなライターでもあり、あの「レナードの朝」の原作者である脳神経科医オリヴァー・サックスに、グランディンさんのインタビューをもとに書いた『火星の人類学者』(早川書房1997、終わりの2つが自閉症関連)があります。表題はグランディンさんが「人とお話していると私は火星からやってきた人類学者の気分になる」というところから付けられています。

1999年夏のグランディンさんに続いて、2000年はドナ・ウィリアムズさんが東京と大阪で講演されました。日本でも森口奈緒美さんやリンコ・ニキさんの著作や発言が注目されています。

こうした高機能自閉症者は、自閉症の人がどのような世界に生きているのかを示してくれる案内者です。自閉症者は障害の軽重に関わらず、同じ方向性の困難さを持っているので、どなたにとっても役に立つ情報がたくさんあります。